

さわさわ すごすご



さわやかに さわさわの旗 空の色

自由の風受け 誇らしきかな

かおり女

新年のご挨拶を申し上げます。

重信房子

2009年、ガザ空爆、日比谷派遣村は、ブッシュとその追従者たちのでたらめさのつけを象徴するようなできごとで幕をあげました。闘い・生存の闘いが強いられながら、変革の意志を強く持って進むことによって、また、希望が育つ新年と言えます。

また、2009年は東大闘争や赤軍派結成、全国全共闘結成の69年から40年の節目の年です。昔の反省を込めて戦術ではなく、思想のラジカルさを心に、小さな一歩からの変化変革を共に！と願っています。

私にとっても今年は変化の年となりそうです。今年の遅くない時期に最高裁判決です。また、去年の師走に腸に腫瘍が発見され手術からスタートの新年です。捨てる覚悟をしては拾ってきた命、ひるまず進めの心境です。「さわさわ」の絆や「オリーブの樹」の絆に支えられてしぶとくみんなと進みます。判決まで短い時間と競争しつつやるべきことに最善を尽くします。みんなに変化変革の新年をたくします。心は共に！「さわさわ力」が発揮される新年としましょう！今年もどうかよろしく。

癌告知捨てては拾って来た生命

天命のまま定命を生きん

「さわさわ」の旗を掲げ街に出よう！

森本忠紀

昨年末、重信さんの大腸に腫瘍が発見されました。腸内視鏡検査により、4センチ大のものが二箇所あって、進行性の大腸癌との診断が下され、早期の手術が予定されています。この緊急事態に私たちの間に衝撃が走り、少なからぬ動揺が生まれました。けれども、獄中の重信さんからは、「さわさわ」との絆、「オリーブの樹」との絆に力を得て、困難に立ち向かうとの、力強いメッセージを何度もいただいております。こちらでもできることをやることで少しでも元気づけることができるような力を送りたいと思います。

この、「支える会」を始めた時から、「支える」とはどういうことだろう？何をすれば支えることになるのだろうか？とずうっと考えていました。そして、重

信さんを支えると言う時、私は重信さんと一緒に生きたいと願いました。と言っても、重信さんと同じ考えになるとか、何らかの党派的なものを作ろうというわけではありません。そうではなくて、私はより私らしく生きたいということです。そもそも、今の世の中、人のことなどそっちのけ、私たちは誰もが自分さえ良ければという風潮に染まりがち。お互いが一緒に生きてないことが、重信さんのような人を獄中に閉じ込めているのだ。重信さんが獄中にあることは今の私達の社会がどのような社会なのか、今はどのような時代なのかを明らかに語っている。すなわち私達の中に確かな絆というものがなくバラバラであるということ。この時代に生きる我が身の頼りなさ、拠り所のなさに気付くのであります。かくして、重信さんと一緒に生きたいという私の願いは、今この時代を生きる、生きとし生きるあらゆる人々と一緒に生きたい、という願いとなります。

去年の師走、よく晴れた一日、私は、大阪阿倍野の陸橋の上で、通る人々に向かって、三線片手に歌を歌っておりました。傍らに「さわさわ」(1)号～(5)号までのバックナンバーを並べて。この日は誰とも「さわさわ」の話をするところまでは行きませんでした。重信さんを取り戻そうという思いを歌に託しての、ストリートパフォーマンスでありました。

そのことを後で田川さんに話すと、『「さわさわ」の旗を持って行ったらええ』。ああ、ほんまにそうやなあ、と私。「さわさわ」旗は多くの方々のカンパで去年、旗屋さんに作ってもらうことができました。そして、10・19の初のお披露目ではかおり女さん、住吉さんの二女性始め、いろいろな人が旗手を務めてくださいました。それ以来、仕舞い込まれたままです。このままでは、今年の秋に再登場する頃には、虫が食っているかも?!本当に田川さんはいいことを言ってくださいました「さわさわ」旗、大いに外に出てもらいましょう「さわさわ」の宣伝と、今秋の円山集会の宣伝の文字通り旗振り役をやってもらいます。かおり女さん、住吉さんもきつと応援してくださるでしょう。また、全国の「さわさわ」読者、会員の皆さん、呼んでいただければ、どこへでも喜んで寄せていただきます。

久し振り会えば懐かし「さわさわ旗」街に出でんと誘うごとく

私の京都・大阪物語（6）

重信房子

<赤軍派国際部へ参加>

「国際根拠地論」に基づいた1970年3月のよど号闘争によるピョンヤンへの着陸を経て、以降多くの弾圧にさらされました。

それでも赤軍派は70年6月のころまで「70年秋の前段階蜂起にすべてを賭けて闘う」という方針が続いていました。そして、1970年は「安保決戦」を唱える党派もあって、街頭闘争や武装闘争は弾圧に抗した手段としてまだ盛んな時代です。

「1972年沖縄返還」の日程が日米政府の間で最終段階を迎えており、反安保、沖縄闘争として闘われていました。ことに、よど号ハイジャックのあった70年は、4・28沖縄デーや、全国全共闘の6・14反安保集会、10・21国際反戦デーや、12月沖縄コザ市での叛乱に対して騒乱罪が適用された年にあたります。赤軍派は「よど号弾圧」で逮捕者を出しながらやはり武装闘争をめざしていました。

私は70年5月に再び逮捕され、出てきて以降、国際部として活動に復帰していきました。当時、これまで活動していた大学や三里塚や大衆闘争の基盤を建て直せないまま、ますます党の専従的な活動になっていきました。現場の活動は大学の後輩から聞いたりしていましたが、あまり一緒に語り合う時間もなくなっていました。

70年に国際部活動を始めて間もない頃、7月7日盧溝橋事件の33周年記念集会で、中国人の「華青闘」から、日本人の闘いのあり方、新左翼批判が出されました。中核派を中心に批判に答えてきちんと自己批判し「血債の思想」などと述べながら、入管闘争などが広く闘われていきました。また反軍自衛官の闘争や狭山差別裁判闘争など闘われており、それらを耳にしながらも私たち国際部は、「日米同時蜂起」のための派遣準備として活動していきました。私が逮捕されていた間にTさんらの日本委員会リーダーは、箱根で会議中に急襲されていました。また、ピョンヤン行きの世界委員会もなしのつぶてで、私が逮捕されていた間にまたいろいろ組織を再編

していったようでした。Tさんらが逮捕される以前に、ハイジャックの前か後に出していた方針がP・B・M作戦というものでした。私もこのごろ古い資料を読んで思い出したP・B・M作戦の名称です。Pはペガサス作戦で、塩見議長らを奪還し国際根拠地を作る。Bはブロンコ作戦で、米国のペンタゴンと霞ヶ関日米同時に70年秋に蜂起する。Mはマフィア作戦で、金を集めるというものだったようです。こうした方針を出していた人々は既に捕まってしまいました。そして、当初からの指導部の一員であったDさんが入れ替わりに保釈で出てきました。こうしてDさんがリーダーとして建て直しをしているところでした。私が国際部に関わったのはそんな時でした。

68年に国際反戦集会に参加した米国の組織ブラックパンサーの人々は69年にも引き続き訪日しました。ブントが分裂してしまったために、赤軍派結成前の7月か8月、私は友人たちを羽田に迎えて、山谷や三里塚闘争を紹介したりしていました。こうした繋がりから70年蜂起の米国側共同主体の細かいコネはあるようでした。これは、ブラックパンサーがOKしていたわけでもなく、赤軍派の一方的な構想に過ぎなかったと思います。とにかく米国にコネがあると、そう聞いて国際部の会議は始まりました。東大、京大、阪大のまじめな学生たちを中心に学習会をやっては、どう派遣体制を作るかなどのお話をくりかえしてしていました。国境は当時はひどく高いものだったのです。

私は友人が第三世界の革命に詳しい人々もいて、その影響もあって、また、ゲバラの闘いに共感を強く持っていたので、「日米蜂起」には、なじみませんでした。それでも派遣のための条件作りをあれこれ考えていきました。当時は外貨規制もあって、また、外国旅行というのは大変遠い条件のような時代です。それでも本を読んだり、学習会をやっているよりも、正規に海外旅行にいつてみるとか、もっと実行するバリエーションを考えたほうがよいと思いました。そのころ国際部には、アメリカ組の東大の友人たちの他に阪大の友人も何人かいました。

<国際部の仲間たち>

私が関西に行きだしてからは、大阪の通天閣の側のNさんのところを拠点に活動しているところは国際部に数人の阪大の学生たちがいました。

大阪には桃大のKさん、Nさんや、市大のNさんとかがいましたが、活動のフィールドが違っていただけでしょう。私の活動のフィールドにいたのは、大阪では、市大のKさんや、阪大の人々でした。どのように阪大の人々と知り合ったのかはよく思い出せません。初期の頃、たぶん7・6の後、赤軍派として秋に登場したころから、阪大のOさんが東京にいたためだと思います。学生で運転免許を持っている人が少ない中、Oさんが持っていると言ったので、人民組織委員会の69年秋の蜂起準備の頃、あちこちからレンタカーを借りてもらうことができました。そしていつの間にか乗っていた人が支払えずに車を放置したらしく、Oさんに大変な請求が来てしまったようでした。何とか対策を立ててほしいと、人民組織委員会がまだ機能していたころに抗議してきたので知り合いになりました。その後、彼の紹介で何人もの阪大生と知り合い、国際部の活動を一緒にやろうと誘ったりしました。

そのころ、たしか70年の春だったように思います。(71年のアラブ出発前だったかもしれませんが)「阪大新聞でパレスチナについて書くのでこの詩を訳してほしい」と英文の詩を渡されました。パレスチナで有名な詩人のマフムード・ダルウィーシュの「別れのハンカチーフ」という詩だったと思います。何の理由だか、英語もできないし、訳詩などやったこともない私がやる破目になってしまったのです。彼らとの会議の後、阪大のサークル室だったか、辞書を引き引き意味をやっと理解したけど訳詩というには難しくて無理でした。訳も不正確であまりにおこがましいと断りました。でも新聞の囲み記事だったか、とにかく一面にもうスペースをあけてあるので、穴をあけるわけにはいかないと言うのです。じゃあ、訳詩でなくそのイメージからとって、意識の詩でよいからと言われてしぶしぶ引き受けました。ダルウィーシュの名も私の名も出さないということでやっと合意して、苦肉の詩を書いたのを思い出します。67年の10・8のあとから、全然詩を書けなかったし、書けなかったのに、何が理由でそんなことをした

のか今も思い出せないのですが、できあがった新聞を見たのは覚えています。この友人たちが再編された国際部にも参加していました。そして、私がアラブに行って以降の赤軍派の、当初は連絡先にもなっていました。彼らは方針と現実のギャップにどうするか考えあぐねていました。国際部キャップだった関大のWさんが戦線離脱後、茨城大のSさんが国際部のキャップとなりました。Wさんも方針が出せずにいたのです。それは今から考えると当たり前だと思います。「日米同時蜂起」、霞ヶ関とペンタゴンに同時突入の方針作りがうまくいくはずがありません。でもそこに立ち向かっていったのが、夢とロマンの観念的な私たち赤軍派でした。国際部のリーダー、Wさんがいなくなってから、パレスチナ行きのチーム作りが本格化していきました。彼がいたら率先してパレスチナに活路を見出したかもしれません。また、武装闘争そのものを疑問視して去ったのかもしれませんが。

＜パレスチナへの道＞

70年は、パレスチナの情報が日本のメディアにも登場していくようになり、私自身はそれに注目し、パレスチナこそ国際根拠地たりうるのではないかと考えていきました。パレスチナでは国境を越えたハイジャックやゲリラ戦を行っていること、きっと、それらが持続できる条件があるにちがいないと思いました。パレスチナでは68,69年にもハイジャックなど闘争がさかんでしたが、ちょうど私が国際部になって活動し始めた夏から、ヨルダン軍とパレスチナゲリラの内戦対立が続きました。

具体的な当時の政治状況としては、イスラエルをバックアップした米国の、調停提案をイラクやシリアが拒否する中で、ヨルダンが受諾の意向を示したことに始まります。ヨルダンはパレスチナの代表権も主張していました。パレスチナ人の祖国解放やパレスチナ人がパレスチナを代表することを許さなかったのです。(ヨルダンは1948年の第一次中東戦争時、ヨルダン川西岸を併合してヨルダン領としてきました。)しかし、パレスチナ人は70年の8月、パレスチナ国会にあたるPNCを開き米提案を拒否しました。そして9月1日にはヨルダン国王が狙撃されるという事件があり、ヨルダン軍とパレスチナゲリラの戦闘が始まりました。その後、PFLPに

よるハイジャック闘争が続きました。9月12日には、PFLPはヨルダンの砂漠の革命飛行場で、3機のジャンボ飛行機を同時に爆破しました。9月16日ヨルダンは軍事政権を組閣し、ゲリラへの対決宣言をし、9月17日からヨルダン内戦が始まりました。そのころかその後、PFLP議長はピョニヤン、中国を訪問中で、日本の新聞にも記事が出ていました。当時、中国はパレスチナゲリラ支持を表明しています。シリアがゲリラの側に立ってヨルダン越境しようとして、米がシリアを牽制し介入し始めます。結局ヨルダンはナセルの仲介で軍事政権を解散し、9月27日カイロで、ヨルダン王、PLOアラファト議長の間で停戦協定に調印しました。その翌日、ナセル大統領は52歳の若さで心臓発作で亡くなりました。アラブ中、巨人を失った悲しみに包まれました。

こうした中東の様子には私は強い興味を持って、新聞や週刊誌などでフォローしていきました。そして、アラブの専門家と接触し学びながらパレスチナ問題を国際部としても学習していきました。このとき、アラブ、パレスチナ側と連絡をとっている人物から、パレスチナではPLOもPFLPも世界中からボランティアを募っているという話を聞きました。医者、看護婦、技術者を歓迎し望んでいるというのです。私にも行く人を探してほしいと言われました。こうした話は東京ではなく、京都、大阪の人々とのコンタクトで始まりました。私は赤軍派の医者たちや奥平さんのことがパッとすぐ頭に浮かびました。私は当時赤軍派の責任者であったDさんに、ブロンコ作戦はそれとして、パレスチナこそ国際根拠地として準備すべきだと報告しました。前回にもこのあたりは書きましたが、Dさんや国際部の合意を得て、パレスチナへボランティアを派遣することになりました。パレスチナへのボランティアの派遣は「日米同時蜂起」で頭を抱えていた国際部も大賛成でした。夏の終わった、もう秋だったように思います。

<パレスチナへの準備>

私が奥平さんと知り合ったのは、ちょうどパレスチナの話の出る数ヶ月前だったように思います。友人たちとのカンパ活動の中で、彼の家に訪ねて行った時に出会いました。その時の印象は、誠実で寡黙、状況を切り開

いて何かをなす人だと思いました。赤軍派の医者は関西にいて、すぐ国際部のアラブ派遣隊として準備を始めました。技術者としては、まずあの誠実な奥平さんにこそと考えました。奥平さんに話しをすると、喜んで参加すると即答しました。後に弟の純三さんの話では、夕方、部屋に戻ってみると、今日はすごくいい話が届いたと喜びながら、パレスチナへの出発の夢を語っていたそうです。パレスチナへ、パレスチナの解放の闘いに身を尽くすことにこれからの活路が見えました。パレスチナに行く人々は関西の人材ばかりだったので、実際に行く予定の人々が仲介者とのコンタクトを行っていました。70年秋の、この話が始まった当時は、私自身がパレスチナへ行くという計画はありませんでした。よど号の仲間たちの消息も途切れていて、外国に出て何らかの糸口を探すべきだと、国際部では話をしていました。それには他の人もいましたし、私もパレスチナを知りたいとは思いましたが、当初は送り出す側にいました。当時はまだ、小学校の先生にいつかならうと考えていたところがありました。

奥平さんが中心になってアラブ通の仲介者とのコンタクトをしていました。そんなある時、奥平さんと一緒にアラブ通の人と会った時のことです。大事そうに木棺の破片をみせてくれました。彩色の、古い板でした。私にも奥平さんにも、70cmx30cm ぐらいの、その木片の価値はわかりませんでした。パレスチナではなく、エジプトの古いミイラが入っていた木棺の一部で、価値の高いものだそうでした。これを元手にして、パレスチナへの寄付の基金を作りたいとの話でした。私はこの木片が高価なものとはあまり思えませんでした。無雑作に預けられて、何とかしたいと思いました。関西でNさんに相談すると、「うーん、これは日本では骨董価値が難しい。大英博物館とかの証明書とかがないと…。うちにもっと骨董価値のあるものがあるけど、そっちのほうが金になるかなあ…。それを寄付してもいいよ。」などと言っていました。東京の友人の、ある大企業社長の息子Mさんは人脈が広いので相談しました。骨董品として売れないことはわかったようで、S百貨店の社長に話をつけて、エジプト展など、物産展をやって木棺を売ったらどうかと話が大きくなりました。当時は今のようにそんな企画はな

く、グッドアイデアでした。それでも木棺自身には証明書がなければ売れないという話でした。結局、日本でその考古学的価値を証明する条件探しは、大英博物館で鑑定証明を書いてもらうしかないということで、話はアラブ通の人に戻されました。S百貨店で物産展をやる力量も、スペースを埋める展示品も、まだこちらの条件はありませんでした。結局その話は取りやめとなってしまいました。でもパレスチナボランティア会議は楽しいものでした。中東の歴史も学びました。その後、アラブ、パレスチナは戦闘が厳しくなり、ハイジャックの連発の闘いの様子、ヨルダン政府軍に対して互角に戦っている様子、ボランティアのヨーロッパの左翼が大勢、そのヨルダンの戦闘に加わっていることなど、PLOやPFLPの様子をアラブ通の人から教えてもらいました。それらは国際部のパレスチナ行きのメンバーの会議に持ち込み報告し、難民キャンプの厳しい状況を語り合い、出発に向けて急ごうと話していました。遅くとも、70年中に医者、看護婦、技術者3名は出発する条件を整えていくことになりました。

<赤軍派の変化>

私たちがパレスチナだ！とボランティア準備をはじめているころ、赤軍派中央でも、当時トップにあったDさんと森さんの矛盾が深くなりました。秋の「前段階蜂起」を「連続蜂起」という名目で取り下げた後に、どう闘うのかを巡って、現実の弾圧の前で問われました。塩見奪還などのゲリラ戦を主張していたのはDさんで、蜂起論と持久戦がどうのこうのと、森さんが毛沢東路線を説明しながら主張していました。独り毛沢東路線に親和的だった森さんに、Dさんは同調しかねていました。前に京大のUさんが「党内紅衛兵派」などと揶揄されていたけれど、ブントも赤軍派も、毛沢東路線は勉強もしていなかったし、シンパシーも持っていませんでした。

当時、軍事行動を求めて結集してくる人々に対して、現実的には、ゲリラ戦の持続的な闘いをどう実現していくかと問われていたのでしょう。Dさんは「指導に自信もない、森を信用できない。」と、12月のある日、トップであったにも関わらず、組織を去って行きました。これは、傍らにいた私の感じで言えば、日常的な些細なことで、森さんにDさんが嫌気がさし

たということもあったと思います。権力とのシビアーな闘いをしていると、身近にいる者と本音率直に話し合えることが、頑張れるよりどころです。身近な人と不信感ではやりきれません。これ以上みんなに責任ある指導などできないとやめていくDさんに、いわばDさんがいるからやってきたようなOさんや何人かはそれを知って、やはり、戦線を離れると言いました。当時、これ以上、武装闘争をやっても展望はない、勝利の社会革命にもう一度立ち戻って考えるべきだと、考えていたのかもしれませんが。情熱的に頑張ること、前に進むことしか解決はないと思い込んでいた私は、Dさんの決断に大変がっかりしました。信頼してきた分、無責任だと思いました。当時の時代の攻防の波は、よど号事件以降、「武装闘争をやめてもう一度考えるべきだ」という壁にぶち当たっていたのです。しかし、「状況を切り開くには武装闘争しかない」という風潮にあって、この前提を転換できませんでした。「武装闘争では勝利し得ない」と考えること自体が、日和見のように感じられたのです。あの時、Dさん個人の問題としてやり過ぎず、立ち止まることができなかったことが、結局、70年12月下旬からDさんに代わって、初めて森さんが赤軍派の指導者として権力を持つ道を開きました。先日、旧友の同志社のSさんが面会に来たおり、「もしDがいたら、連赤はなかった。Dがいたら森は指導者にはなれなかったし、あんなことにはならなかったよ。」との、DさんびいきのSさんの話を聞きつつ、本当にそうだろうと思いました。でも、森さん自身、本当は指導に自信もなく、Dさんの撤退に困ったと思います。でも引けないぞ、そんな思いだったのかもしれませんが。私は森さんの困難に配慮ができなかったと当時を思い返します。

このころ、誰が言い出したか、はっきり記憶していませんが、「パレスチナ部隊は赤軍派として行くべきだ。奥平さんも赤軍派として責任を持って派遣すべきだ」という話が出てきました。アメリカ部隊はFさんら、みな党员だったこともあったのでしょう。奥平さんもその提案に対して、行く以上それでよいと、こだわりませんでした。それでTさんらが奥平さんと話してメンバーとなりました。そして、その後、奥平さんは東京の軍でS

さんの指揮下、一時期を入隊訓練をして過ごすことになりました。晩秋から71年の初め頃までの時期です。

<パリシェ事件>

パレスチナ行は情報が漏れたら「別件逮捕」などの妨害で行けなくなるので、限られた国際部の秘密の行動でした。赤軍派への敵の弾圧は逮捕ばかりか、ずうっと搜索や尾行、張り込みの、活動妨害が続きました。加えて、各々が赤軍派を名乗り勝手に活動する人もいたりして、組織的な活動たり得てないため、あちこちで綻び始めていました。

70年秋から冬のことだったと思います。同志社のMさんが赤軍派をやめると言い出したことが発端でした。69年に出会った、血気盛んで義理人情に熱い同志社の人々より少し遅れて、大菩薩峠事件の後になって、批判を持ちつつ、赤軍派でやるしかないと入ってきた人々の一人がMさんでした。よく校舎や集会でMさんが名調子のアジ演説をしているのを見かけたものです。多くの同志社の仲間たちのように、そういう日常的交流から私も話すようになったのでしょう。組織化などを共同した記憶があります。大阪で再会したMさんはあれこれと、赤軍派への不満や批判を述べていました。それに赤軍派では革命の展望がないと語りました。彼もリーダーのうちの一人なのにと、それは私も密かに本心で思っていたことなので、余計グサリと腹がたちました。梅田の駅のすぐ近くにある、オールナイトの喫茶店のパリシェで話をしていました。もう深夜でした。24時間の喫茶店は、マイアミとパリシェで東京にも大阪にもありました。当時は地下街でなく地上にあったパリシェは縦に細長い奥行きのある店です。私はMさんと随分奥の座席に向かって座っていました。私が入り口に背を向けて、Mさんが入り口を向く格好でした。繰り返す赤軍派批判することに腹を立てて、「あなたは関西のリーダーの一員でしょ！」と言い争いになって、私はコップの水をひょいとMさんめがけてひっかけました。Mさんはさっとよけたために、ちょうどMさんの後ろに背中合わせに座っていた和服の美しい「姉さん」という感じの人に水がパツとかがってしまいました。「あ、すみません！」と私は謝りましたが、美しい姉さん風のその人は、きっと睨んで立

ち上がり、「どうしてくれるんだよ！着物は商売道具だよ。濡らされて黙ってるわけにはいかないね。洗い張りにしたっていくらかかるか分かってんの？ちょっと、あの人呼んできなさい。」と、立ち上がった彼女は側の少しヤーさんみたいな若い衆に言いつけました。

「これはやばいことになる。女なら何とかなるけど、男なら袋叩きにあうし、この人たちに払う金はない。とにかく私の弟ということにするからあなたはすぐに逃げて。消えた方がよい。後は私が何とかするから。」と、私はMさんに言い、促しました。Mさんもさっと立ち上がってドアに急ぎました。ところが、奥からドアまで細長い上に、喫茶店にたむろしていた者たちのほとんどはこの姉さんの仲間だったらしく、入り口の所でMさんは阻止されて、首根っこを抑えられて戻されてしまいました。困ったな。「水をかけたのは私で謝ります。でも、彼には何の罪もないのよ。帰なさいよ！」と言っているところに親分登場。「何があったんだよ」と迷惑そうな顔で、着流しに雪駄のはきもの。姉さんが事情をワーワーと言い立てています。その話が長いので、Mさんと私は、この人たち、本当のやくざだね。こういう人なら武器とか手に入らないかな、などと、こそこそ話していました。私は500円札を出して、「悪かったのは私です。でも払うお金はこれしかありません。洋服のクリーニング代です。洗い張りはいくらか知らないけれど私には払えません。謝ります。」と謝りました。親分は、「何だ、東京の学生だな。わしらに脅迫されたと言って、この辺の警察に言っても駄目だよ。その辺の曾根崎署にタレこんでみな。この辺はワシらの縄張りで、みんなこっちが話がつくんだから。500円じゃ話にならないだろう。」などと言いました。私は「お金はないです。いくらかかるか知らないけど500円しか出せない。必要なら領収書を見せてくれたら後で支払うことはできますよ。後払いにしてもらいたい。」と言いました。この親分は、始めから、呼び出されたことに乗り気でなく、また、こんな喧嘩で恐喝したくもないという風に見えました。そこで私は、「あなたが筋もんなら、聞いてもらいたいのは、こっちの話です。私は赤軍派です。赤軍派は知っているでしょう？あなたなら武器は手に入るでしょう？こうして会ったの

も何かの縁ですね。この縁に武器の話をしたい。」と、私も開き直すことにしました。親分は驚いて、「お前、いい度胸しているな、どんな話や？」と乗ってきました。姉さんの方は、彼に会いたかったらしく、「ねえ、あんた、もういいから行こう。」と誘うのですが、親分の方が気をよくして、「黙ってろ。オイ、ビール持って来い！」と店の連中に言って、ビールを持って来させ、私が置いていた500円を、「この件はこれで終わりにしよう」と納めて、きちんと500円を姉さんに受け取らせました。

「座り直して話を聞こうじゃないか」と鷹揚に話しに乗ってくれたのは嬉しい展開でした。もともと私は、世田谷の子供時代にクラスメートの、近所のTちゃんの親父も祖父も「筋もん」のヤクザだったので、ヤクザを「怖いもの」とは考えませんでした。近所のボロ市通りのテキヤも仁義を守り、礼儀正しく、素人に手出しをしない、きちんとした人たちでした。この親分もそんな人に見えました。横でMさんもホッとしていました。それからビールを飲みつつ、いろんな話をしました。彼は自分が五島列島の出身であることなど、生い立ちも語ってくれました。そして、左翼は頭を使わず観念的だと、さんざん批判してました。もうあと1年くらいで沖縄は返還されるのだから、パスポートを取って、今から買出し部隊を沖縄に派遣しろ。米兵から流れる銃を買う方が、交番襲撃よりはるかに割りがいいと助言してくれました。その買い方を教えてくれて、一軒家を借りて庭に埋めるか、埋め場所はいくらでもあり、税関のなくなった沖縄から、後で本土に持ち帰る方法を教えてくれました。それからまた、逮捕されたらちゃんとして責任を取る人を決めて、他を守るべきだ、左翼は仲間を守らんから駄目だなどと、ひどいことを言っていました。私とMさんは苦笑いで聞いていました。そして、私たちがすぐ信用できるかどうかわからないので、まあ、つきあってみよう、ホンマもんなら何とかしようと言って、彼の名刺をくれました。そして、できたばかりの、梅田の地下街の店を教えてくださいました。そこをコンタクトにしようと。随分話が弾み、その後、その店で待ち合わせました。地下街の一等地の店は、全国からの地酒が飾られている、新しい店でした。「いつでも来い。歓迎するよ。」と言うので、

出かけました。赤軍派のリーダーたちにもこの話をしました。でも赤軍派はみな真面目な人ばかりです。「やばいぞ、やめとけ」などと言うばかりでした。私はあの親分はほんまもんの、仁義を守る人と見受けたのですが。その後、友人に後のコンタクトを託して、私はアラブに行ってしまったのです。その後のことはわかりません。

一炊の夢にはあらずパレスチナ

チェ・ゲバラを胸に語りしあのころ

岡 真理さんの発言（～京都新聞より～）

ナクバ

パレスチナにユダヤ人国家イスラエルが建国され、この地に暮らしていたイスラーム教徒とキリスト教徒のパレスチナ先住民80万人余が虐殺、強かん、強制追放等によって民族浄化され、難民となった。その出来事から今年で60年。現在、パレスチナ難民は国連に難民登録している者だけで400万人を超える。人が生まれ還暦を迎えるまでの歳月、パレスチナ難民は異邦で繰り返し虐殺にさらされながら、難民的生をしいられているのである。いまだ終らないパレスチナ人のこの苦難の歴史の根源にある出来事、それが、60年前、彼らを襲った悲劇である。パレスチナ人はこれを「ナクバ」（アラビア語で「大いなる破局」の意）と呼ぶ。

その悲劇の出来事から60年目の今年、世界各地で「ナクバ」を記念する行事が開かれている。日本でも、フォトジャーナリスト広河隆一さんのドキュメンタリー映画「パレスチナ1948 ナクバ」が公開され、「ナクバ」という言葉が徐々に知られるようになった。これまでは、「ホロコースト」という言葉が世界的に人口に膾炙し、人類普遍の悲劇として記憶される一方で、「ナクバ」などきいたことがない者たちが大半だった。メディアがパレスチナ問題を西岸とガザの「占領問題」に矮小化し、パレスチナ人の抵抗を「イスラーム原理主義のテロ」に還元する中で、ユダヤ人国家の創設によって60年前、パレスチナ人がいかなる暴力を被り、現在なお、その悲

劇の直接的結果のただなかに生き続けていることはほとんど理解されていなかった。今年、「ナクバ」という言葉の到来とともに、「60年」という時の重みが、私達の眼差しを出来事の根源へと向かわしめている。けれども、イスラエルの建国を「ユダヤ民族の悲願の成就」「栄光の瞬間」として記憶するイスラエル・ヒストリーにおいて、民族の「汚辱の歴史」である「ナクバ」の記憶は居場所を持たない。それは、「ユダヤ人国家」の倫理的正当性の基盤それ自体を掘り崩し、イスラエル国家の存立自体を危うくするものだからだ。

パレスチナ問題の根源にある「ナクバ」を見据えたならば、この問題が聖地をめぐる宗教対立や民族間の土地争いなどではありえないことが分かるだろう。それは、圧倒的な暴力によって、パレスチナ人という一族全体が歴史的不正を被ったという出来事である。パレスチナ人が求めているのは、それが歴史的不正であったことが認められ、否定された自らの尊厳が回復されることにほかならない。

それはまた、アジアの東で、旧日本軍性奴隷の被害女性たち、戦時下の強制連行・強制労働の被害者たちが求めていることとも重なる。大陸の西と東でイスラエルと日本は自らの歴史的不正に対する否認の同盟をむすびながら、これら被害者たちがすべて亡くなって「時効」が成立するのを待っている。だが、彼らは知らない。人間の尊厳の回復を求める闘いは世代を越えて受け継がれ、歴史的不義が贖われるまで続くということ。

(京都新聞 2008年8月5日付夕刊より)

ガザの殺戮に「否」と言ったか

—泥沼化するパレスチナ問題—

私たちは知らなかった—ホロコーストのあとで、ドイツ人はそういつて自らを免罪しようとした。「知らなかった」ということが、もし言い訳になり得るとすれば、それは、「知っていたら必ずや黙っていなかった」という含意があるからだ。だが、本当にそうなのか？私たちは、人間が収容所に閉じ込められて、なす術もなくころされているのを知っていたら、必ずや

「否」の声をあげるのだろうか？では今、ガザで起きていることは？百五十万の人間を出口なしの檻に閉じ込めて、空から海から陸からミサイルを砲弾を浴びせて殺戮する。そんなことが、世界注視のなかで、公然と、半月以上にわたり続いている。まるで、「知っていたら、おまえたちは本当に声をあげるのか？」と問わんばかりに

この「公然性」は私たちをみな、殺戮の共犯者にする。いや、私たちはその前から共犯していたのではないか。過去三年間、封鎖されたガザで、水も電気もガスもガソリンも、ライフラインのすべてをイスラエルにコントロールされ、かろうじて生命だけを維持するような「生かさず、殺さず」の状況に百五十万もの人間がとどめおかれてきた。だが、私たちはそれに異議を唱えず事態を許容し、そうすることで殺人者たちにメッセージを送っていたのではないか。パレスチナ人の生など私たちに関心がないと。ガザという監獄でパレスチナ人が「これが人間か！」という生を強制されていたとき、私たちが大きな声で「否」を訴えていたならば、果たして今回のこの殺戮はあり得ただろうか。殺人者たちに青信号を出したのは私たちではないのか？

ガザは今「監獄」から「絶滅収容所」に変貌した。「アウシュビッツ」「ヒロシマ」と同じく、「ガザ」は人間が人間であることの臨界を意味する言葉となってしまった。「ホロコースト」とは、「ヒロシマ」とは、私たちにとっていったい何だったのか？「人間の命は決してこのようにあつかわれてはならない、人間とは決してこのように死んではならない」という命題は、これらの悲劇から私たちが掴み取った、けっして手放してはならない真理ではなかったのか。

このような出来事のあとで、ガザの人々はなお、人間の善性を信じることができるのだろうか？彼らは許すことができるのだろうか？ミサイルと砲弾の雨のなかで逃げ惑っていた彼らを知っていながら見殺しにした世界ガザを瓦礫の海にして、八百名以上を犠牲にすることで、イスラエルは証明したいのだろうか？世界は人間がこんな形で殺されるのを知っていても止めはしないのだということ。このとき、破壊され尽したガザの街とは、

倫理的に破壊されたこの世界の似姿になるだろう。

だが、攻撃が始まってから二週間ほどのあいだに、市民社会のネットワークはインターネットを駆使し、グローバルにつながりながら、世界各地で、緊急の抗議行動を組織し、「否」を訴えている。人間はなんぴともこのように死んではならないと。攻撃をテロに対する自衛と位置づける日本のマスメディアは報道しないが、テルアビブでも三日、ユダヤ系市民を中心に一万人以上が一大反戦デモを行い、封鎖と占領による尊厳の破壊こそが問題の根源だとして大義なき戦争を告発した。

たとえ停戦が実現しても、封鎖と占領が続く限り、問題は解決しない。爆撃で虫けらのように命を奪うことも、封鎖で尊厳ある生を奪うことも、人間性を顧みない点において等しい。私たちは訴え続けなければならない。なんぴとも決してこのような生を生きてはならないと。

(京都新聞 2009年1月12日付朝刊より)

—パレスチナ問題で一貫して積極的に発言しておられる岡 真理さんの京都新聞に掲載された文章のうち、ご本人に了承を得て二つの記事を転載させていただきました。—

パレスチナと世界の現在 (3)

重信メイ インタビュー

H=原啓介 M=重信メイ

H: ない?

M: ない。そんなのあり得ない。と思う。だから、一人ひとりが例えば今の日本でいうと例えば・・・、今の日本はすごい・・・あの話し違うけど、私は子供の頃に教えられたことなんだけれども、ゴミを捨てないということ。

H: ゴミを捨てない・・・

M: 私はいつでもいろんなことを考えるときはそれなんだけど、やっぱり多分、今の日本と、例えば 100 年前の日本の道のきれいさとか、ビルの中のきれいさとか全然違ったと思う。でもその時は多分本当に少数の人がゴミを捨ててはいけないと思ってたと思う。でもみんなやってるから・・・

って思っちゃったらもう、延々と変わらない。でも自分から変えるし、できるだけの人にはそれを一緒に変えようよ。っていうことを伝えていけば、絶対いつか時間がかかったとしても、変わる。それは1年、2年、3年、5年、10年ではなかったとしても、絶対変わることは変わるから、それを自分のセルフイッシュな、今の5年間の間で代わって欲しいっていうだけだったら、何にもしないっていう方向に行っちゃうけれども、いや、本当に何か変えたいんだったら、別に私がお年寄りになっちゃっても変えて欲しい。変わって欲しいって思ってるんだったら、今から変えていく。っていうことだと思う。

H: 今、このジャーナリストなのか、マスコミのキャスターなのかね、いずれにしてもある自分の発言っていうのをね、基本的には自分の考えでしてるわけで、なんかその・・・それが例えば日本に来る前と、今、来てからかなり経ってますけども、だいぶ変わったっていうことはありませんか?

M: んー・・・

H: 意見の作り方というか、自分のね。

M: 私はそれは誰だって別に(変わって?) いくことだと思う。皆さんも多分若い頃の自分達の意見の表現の仕方と今では社会人としての意見の表現の仕方っていうのは違うと思うし、以前では多分棒を持ったり・・・

H: あんまり変わってないけど・・・。(笑)

M: (笑) 棒持ったり、そういう解決にならないような暴力的な手段を取ったり・・・

H: やめてください(笑)

M: いや、嫌なことかもしれないけど、それは事実だと思うんですね。やっぱり内ゲバっていうのはそういうものだと思うから。私は正直言って。でもあの・・・そうじゃなくて今になって冷静になってくると、大人になってきたり、社会を経験してきたり社会人そのものになってくると、やっぱり責任というものがあるんだとか、あるいは、例えば此処にいる目の前の人が悪いんじゃないかって、その位置にいる人が悪いじゃなくて、もっとそ

の大きい政策を変えないといけないんだとかいう、そういうふうな方向に・・・みんな街はしていったと思うんですね、大体。だから、そういうことと同じで、多分私は私なりに中東にいて、中東が私に影響する場にいたところに、いた時に持ってた判断とか意見っていうのと、今みたいに日本に来て、政治もそう簡単には変わらないし、意見も持っても、あるいは周りの人達、特に若い人達には、政治の意見にはあまり興味がなかったりとか、そういう社会の中に入ってきたときには多分私も発言の仕方とか、考え方とかその発言をどう伝えたらいいかっていうことに関しては、ちょっとずつ変わっているんじゃないかって、私は思ってるんですね。

H：今後自分がやってみたいっていうことは何かないんですか？そういう表現の場でもいいし、例えば趣味っていうのか、人生の中でね、必ず・・・例えば今から数年後にはこんなふうになりたい。っていうことはあるのかなのか？

M：えー、私はこんなふうになりたいというよりか、例えば今みたいにこういう仕事を与えて貰ったことによっていろんな・・・多分普通だったら会えないような人達に会って、そういう人達の意見を聞いて、本当に偏った立場で意見を語るんじゃなくて、そういう人達との対話の中で、解決っていうのが、あるべきだなんて思うんですね。だから私は・・・これは日本に来る前からなただけけれども、結構日本はすごい偏っちゃうじゃないですか、左翼なら左翼、右翼なら右翼って。で政府なら政府っていう。そういうの私は多分絶対もう前に進まない一つの理由だと思うんですね。反対に対話っていうのに慣れてれば、どんどん妥協とかもすることもあるだろうけれども、でも本当に全員がちょっといい方向に行けるようになると思うんですね。たとえば今、ねじれ国会とかいう話になってる。これはなんでねじれ国会っていうかっていうと、妥協する立場に置かれた政府はなかったと、今までの政府は妥協する立場でなかったという・・・

H：まあ強圧的だからね、それはね。

M：あったと思うんですね。それも一つ。さっき言ったレフトはレフトで、ライトはライトで全然会話をしようもしないようなことと全く同じ

ことで、政府は政府で妥協しなくて済んでた。でもそれじゃ何にも変わらない。それじゃそれこそデッドで何も解決の方向に行かないから、これからはもっと対話っていうのを重視するのは大切だなんて思ったんだけど、それをするには私もいろんな・・・

H：対話の仕方とかね。

M：対話の相手？

H：相手。

M：どういう意見がある？こんな意見もあるんだっていうその意見さえ知らなければ、自分の方針も考えることもできないって言う・・・

H：きっかけがね・・・

M：だから、その相手をよく知るっていうことはひとつ、私にとっては勉強の一つ。大きい所かなって。

せつかくこういう場にあって、こういう立場に置かれてるから、それこそいろんな政権であろうが、いろんな組織であろうが、社会的な地位であろうがいろんな場面の人々のいろんな意見に触れてみて、次に何かそういう人達との対話をする機会があったり、必要があった時にどういう人なのか、どういう面に対話すべきなのかを、一応自分の中では勉強してきたなって思っていたりする。もう一つは、自分なりにまだずっと前から思ってることなただけけれども、自分をもっと興味があった国際法っていうものに対して・・・国際法を勉強したいというふうには思っていて、で本当は私は日本をもっと外交的に・・・本当は魅力的な評判を持っているんですよ、日本っていう国は。さっきも言ったけど、民衆外交が進んでるから。ただ、その民衆外交だけだと、世の中って外交じゃないんで・・・

H：でもまあ国がね。

M：国が本当に民衆についていくような外交を持ったら、そういうの活かす為にはやっぱり少数の人達の民衆外交じゃなくて日本人一般の人達が国際法っていうものに触れたり、国外の世の中にもっと理解をもてるような認識を持たないといけない。今のような例えば報道の仕方、例えば中国の餃子とか、韓国のこととか、イラクのこととか、なんかそういう恐い、恐

い、外の国は怖いものなんだ、外国っていうのは恐ろしいものなんだ、日本人を潰そうとしてるんだみたいな、メディアの報道だといつまで経っても外に対しても理解、あるいは外交っていうのはうまくいかないと思うんで、より、そういう日本が自分の評判についていける外交ができるように、仕事をしていきたいし、このジャーナリスティックな仕事でも、もっと大勢の人達に、例えば外交的な部分を触れるような機会を作っていきたい。外交問題をもっともっとやっていきたいし、それと同時に自分も昔から興味があった国際法っていうものを勉強をしたいなっていう。

H: 今、日本語で物を考えるのと、英語が主体かな? どっちがどうですか? 自分として、楽ですか?

M: んー。もうなんか殆んど似てる感じはするけれども、でもボキャブラリーのことでメインで言うと、やっぱりまだ英語とかアラビア語のほうが全然・・・

H: 全然・・・?

M: あるけれども、やっぱりこう日常的に日本人と語って日本語話してるから、考えるのも時々日本語になってると思う。でも考えるっていうのは多分今私は日本語使ってた時は日本語で考えてるし、アラビア語で語ってる時はアラビア語で考えてるし、それはその時に使ってる言語によって考えてる言語も違うんだと思うけど、

H: それじゃあ、これで最後の質問ね。

アラビア語で一番好きな単語を教えてください。

M: アラビア語で一番好きな単語? んー・・・"ハリーヤ"です。

H: 名詞なの?

M: 名詞っていうのか。"Freedom" = 自由ってこと・・・

H: "Freedom" 名詞だね。OK、ありがとう。

(「BOKUDENN」より転載させていただきました、重信メイインタビュー 今回で終了です。)

10.19 反戦・反貧困・反差別共同行動 in 京都」集会報告

原啓介

去る2008年10月19日(日)、京都円山野外音楽堂にて昨年に引き続き全京都規模での集会が行われた。昨年は、あの「10.21」という特別なアイコンの日と重なり、また久々の大規模な野外集会ということもあって1,200名の結集を見たが、本年は残念にも850名と大幅に参加者が減った。かといって、この一年間で政治や経済の情勢が好転した訳ではなく、むしろ悪化しているのであり、動員数の減少については主催者団体・事務局の側の問題として今後も真摯な議論が必要となろう。世界は多極化へひた走り、運動の側もまた多局面への柔軟な展開を強いられるようになったということである。

さて、当日は抜けるような青空のもとで、早朝からステージには何やら不可思議な集団が大きな白い布と格闘していた。京都造形芸大の先生と若者たちが繰り広げたアートなパフォーマンスである。

若者のアートはいつの世も反攻のきっかけを作ってくれるのだ。白かったキャンバスは、あつという間に艶やかな原色につつまれて、その中心には大きな「目=まなこ」が描かれた。さしづめ「もっと世界をよく見よ!!」というメッセージなのであろうか。

その大きな目をバックに、仲尾宏共同代表は決意を込めて開会宣言し、集会は始まった。

昨年もインター合唱で最大限の友情出演してくれた趙博(チョウ・パギ)の演奏には関西ならではのユーモアもペーソスもあり、観衆の手拍子も熱を帯びてきた。そこでゲストの辛口評論家・佐高信が登場、ひとしきり小泉構造改革の欺瞞性と安倍・福田へと続いた失政をこきおろすと会場から万雷の拍手が起こった。佐高信は、これから総選挙を迎え本当の闘いが始まると締めくくった。

京都ゆかりのアーティストである豊田勇造は、みずからのバンドを率いて『大きな自由』を歌いきり会場は立ち上がって踊る観衆と一体になった。そうだ、ここは80年有余の音楽堂なのだ、政治一点張りの無粋な集会は京

都には似合わない。音楽もまた反攻のきっかけとなる。

集会は各方面からの戦況報告が相次いで、とりわけ厳しい労働現場からの切実な訴えが皆の心を打った。また沖縄辺野古の緊張や、ウトロの予断を許さぬ現状は、相変わらずこの国の行方が民衆の望む方向へとは重なっていないことを如実に物語っていた。

終わりに集会宣言を満場で採択し、行動提起のあと円山公園から市役所前までのデモに移った。

昨年と違うのはデモの隊列の中に青い「さわさわ」と書いた旗を持つ一団が居たことである。さわさわの旗には、たくさんのひとの「手」が描かれており、円山のステージ背景の「目」が世界を見るとしたら、この手は世界をつなぎ、世界を変えていく「手」なのだ。

後日の総括会議で、「さわさわ編集長」森本忠紀は、「デモをしたり集会をしたりする己れ・・・その自分が、いったい何者であるかをいつも考えながら検証していきたい」と述べた。ひととして生きること、ひととして他者と友情を交わすことが森本の生き方の根幹にあり、彼は今後とも独自の共同性を編み上げていくのだろう。かつて私たちが抗った世界は、パリの五月のように若者の叛乱から始まったけれども、今年は40年の歳月が流れて、幼かった私たち自身の円熟が問われているような気がする。

京都は今も昔も若者の街・・・文字どおりの「老・中・青」の熱い連帯を模索するのに、これほどの条件が整っている都市は世界にも稀少なことから、やっぱり私たちは懲りもせず「三度目の正直」にトライするのだろう。そのとき、世界のあちこちで「手を結ぼう」と模索しているひとたち



と偶然に出会えたら、どんなに幸せな気分になれるのかを嘯みしめて祇園・河原町をそぞろ歩く夜となった。

「このままでええの・・・」、断じてこのままで、いいわけがない・・・

Om i です。おじゃまします。

～お便り～ おおみ女

(おおみ女さんとは、「さわさわ」4号の表紙を飾る版画を作ってくくださった、K・Yさんのことです。この程、お住まいを松山から埼玉に移され、その引越しの機会を利用しての旅の報告を便りとして寄せてくださいました。短歌も投稿して下さることになり、おおみ女はニックネームから来ているそうです。)

12月5日、運送屋さんに家財道具一切合財を預けた私は、寝袋にくるまって松山での生活の最後をおくり、12月7日早朝、着ぶくれた体を電車の座席に沈めました。これから二週間、埼玉に着くまであちこち訪ね歩く予定です。まず最初に向かうのは兵庫県朝来の「あ一す農場」さん。昨春、脳内出血で倒れ、その投薬の副作用のためか全身に湿疹ができ、痒みで引っ掻いたあとが痣になり、銭湯にも行けない(私の貸家には風呂がなかった)状態でした。それが「あ一す農場」の居候体験談に、二週間でアトピーが治ったとの記事があり、早速経営者の大森さんに問い合わせ了承を得たのです。

地図と睨めっこしつつ、3回のりかえし、昼過ぎに和田山駅に到着しました。そこからタクシーで約20分、山の中腹にその農場がありました。私は神奈川でも山梨県境にある津久井という山深い農村に生まれ育ち、私が中学までは酪農もやっていました。その後は植木造園業に変わりましたが、今でも実家は半農を続けています。

農場では大森さん、末娘のアイちゃん、居候歴一年半のKさん(この方がアトピーを治された男性)が迎えてくれました。鶏・豚・山羊・鴨等の家畜もにぎやかに、懐かしい匂いを久し振りに嗅ぎました。三十数枚の田と、大根、人参、春菊など数十種類の野菜を育てていました。私がおじゃました日は、アイちゃんを中心となり炭焼きをしていました。この薪運びが私の最初の仕事でした。滞在中は三人の指導のもと、草刈、卵拭き、豆

の選別、風呂焚き、ごはん炊きなどやらせていただき、三十数年も昔に返ったようでした。しかし三日目に半日ダウンしたうえ、毎日 8 時起床、8 時消灯という、百姓にあるまじき怠慢を続けてしまいました。仕事ものりくりとみなさんに迷惑ばかりおかけしてしまいました。

ちょうどこの頃は満月で、皓々と照る月の光に農場は幻想的な雰囲気にも包まれ、以前訪れたパキスタンの深谷の村を思い出しました。その時同宿だった日本人とは今でも年賀状のやり取りを続け、彼も二児のパパになり、長野で半農生活を送っているそうです。やはり生活の基は農だどつくづく感じます。松山ですっと憧れ続けていた草の香り、木の香り、土に触れ、陽に遊び、水に戯れる暮らし。恋しくて、恋しくて、恋しくて…。一週間後さすがに湿疹は治りませんでした。新鮮な有機野菜と手作りパンのおいしさは、これからの食生活を考え直すきっかけになりました。本当にありがとうございました。

次に向かったのは大和高田の森本忠紀さん。すぎなちゃん、なずなちゃんも元気活発で楽しい滞在になりそうと思っていました。ところがどうにも体がしんどくて、やはり 8 時起床の 8 時消灯、暇があると横になり、トランプ遊びをしたのがやっとでした。しかし、晴天に恵まれ、忠紀さん（チューキさんと呼びます）には市内を色々案内していただき、そのうえ近くの日本庭園で、三線の弾き語りを聞かせてもらいました。「橋のない川」はつい先年読んだばかりで、舞台となった葛城川を散策しながら、蜷（バイ）が流れていないかと覗いてみたりしました。またこの地の特産である靴下の端切れで人形などを作っている教室にも参加させていただき、30cm 四方の敷物をつくり、今この私の尻の下の座布団になっております。いつか生徒さん達の作品を展示したいのですが、その時は私の版画も一緒にどうですか、と誘われました。本当に嬉しいお話でまだまだ素人の私にそんな力があるかどうか解りませんが、将来に夢を持てるのは素晴らしいことです。また、お互いを歌に詠みあったりして、楽しい三日間を過ごしました。

忠紀さんに見送られて岐阜に発った私は途中京都で西と東の本願寺あた

りをウロついた後、夕方駅でまちあわせていた田中博一さんに迎えられました。温かい蕎麦に舌鼓をうち、公営の温泉に首までつかり（人が少なかったのも、湿疹もあまり気にせず入れた）、今宵の宿泊所である山中の禅道場に連れて行ってもらいました。常宿している日本画家の方のお世話で一泊し、翌朝 20 分程の禅を組みました。眠さでうとうととしていたのにもかかわらず、「筋が良い」と褒められ、嬉しさのあまり、本格的に始めようかなどと考えてしまいました。乗りやすい私です。

そうして最後の訪問地、今回の旅のハイライトは泉水さんにお会いすることです。前回初めてお会いした時はあいにくの土砂降りでも、そんなことは全然気にせず、あれこれ思いを巡らしながら、ばしゃばしゃと、雨を蹴とばしつつ岐阜刑に向かいました。お会いしてここは花の少ないのが寂しいとおっしゃってたのが頭の片隅にあったのでしょうか、道端に散り落ちている椿の赤い花がふと目にとまり、一つ拾い上げて面会室に持ち込みました。にこにこお元気そうで、一回目は身辺のことや、兄の和夫さんの法会が東京で行われることなどをお聞きしました。延長の二回目は、私の引越しやこれまでの旅のあれこれを話しているうちに時間となってしまいました。前回、卓球も続けているけれど、今は碁にはまってるんだとおっしゃっていましたが、これからは順変という（無期刑と有期刑の変更）手続き作業を本格的に進めるそうなので、張りつめた忙しい日々が続くのでしょうか。その中心となって動いてくださる F さんという方にもお会いすることができました。泉水さん、どうかお体を大切に。みんなが泉水さんのことを待っていますから。いつまでも待っていますから。

御望野のバス停からの往復路は私にとって当然の道程のように思え、風景を眺めながら歩く 30 分は決して長いものではありません。枝に残った柿が冬の寒さの厳しさと、人々の自然への思いやりを感じさせ、今回の旅も終りに近づきました。岐阜から夜行バスで東京へ、そして友の待つ埼玉へ。新たな生活と人々との出会いが始まる地へと、最後の一步を踏み出します。今回おじゃまし、お世話になったみなさん本当にありがとうございました。これから出会うだろうみなさん共々これからもどうぞよろしく願います。

おさしろ まんり

4号の「私の京都・大阪物語」を読んでいると、最近私がサブタイトルによく使う「^縁」の復活・創出そして集積」という赤い糸の繋がっている光景が臉の向こうに浮上した。「白樺」「高瀬泰ちゃん」—やはりそれは私の「闘争史」でも数十ページに登場する固有名詞であるからなのだ。党派の「史誌」に描かれるような整然としたものではない。

「白樺」特製の焼飯を小脇に抱え、引っ繰り返らぬよう神経を集中しながら急ぐ吉田山中腹の苔むした小径—それが「回想ビデオ」の冒頭シーンである。「大学閉鎖・全学一万人投票」の不成が「大管法闘争」終結の鐘の合図を鳴らして、みんな、いわゆる「消耗の季節」を迎えた頃、「泰ちゃん」は平安神宮近くにあった京都アリーナでの慣れぬスケートで足を骨折、庵のような下宿で臥していたのだ。後年、年に何度か「白樺」を訪れた私を指差しながら、「コイツが運んだ「焼飯」が縁やなあ…」と伴侶の照美さんに半分照れながら語る大きな眼、大きな口、大きな笑い声—それが「第2場」かもしれない

「帰りてえなあ。俺も故郷へ…」相国寺近くの下宿屋の2階で相部屋をしていた高原浩之は、母親が送ってくれたインスタントラーメン1C/Tを前に泣くようにそう言う。さっきまで西部構内の同学会BOXで“帰活ニュース”のガリ版印刷と郵送作業をやってきた二人である。仕方ないので、泰ちゃんを訪ね、出町柳の「赤ちょうちん」でだったか、南区で医者をしている兄さんの奢りの焼肉屋だったかで、やっと元気を回復した高原—それが“第3場”だろうか。その後には、神戸の人権労働争議の支援・共闘責任者を担いながら営んだ、「イカロス工房」という軽印刷屋に泰ちゃんが回してくれた仕事が赤い表紙のXX教本『〇〇の詩』と滝田修『只今潜行中・中間報告』印刷・製本だった。ある早朝、埼玉県警警備課4～5名が2DKの県営住宅である自宅を“ご訪問”、仕事場も家宅搜索されているというので“白樺”に慌てて電話したら、「丁度今、うちにも来てはるんやあ…」と半分笑みを含ませた徳島弁とも京都弁とも付かぬ返答。今でも鮮明

暮れなずむ それぞれの春 山芦屋 ('06,4,20夕、芦屋市聖苑にて)

高瀬泰司、新開純也らと同じ60年安保世代の清田祐一郎の骨上げには、塾の生徒も含め彼の人生を示す老若男女が静かに立ち会った。おそらく清田が編み出した「大学閉鎖・全学一万人投票」戦術の敗北こそ、後々の「大学解体・バリケード封鎖」戦術の母胎だったのだろうと私は分析している。

たれひとり 応答もなく また一葉 ('06,8,27)

京都在住のN医師とともに清田の心身・台所も支えてきた、元医学連の闘士で“尼崎の赤ヒゲ”と呼ばれ、「労災・職業病」の分野でとりわけ貢献した田島隆興の死は、彼の“戦場”=ひまわり医生協診療所の西日の当たる手洗いでの急逝だった。打ち続く同年代同志の死に衝撃が走ったのか、私が全国に送信した訃報FAXには、文字通り誰一人応答がなかった。

あじさいの 石段下を デモの舞い

泰ちゃんの死後、阪神淡路大震災の翌年、'96年7月、クロヤギ(八木俊樹)、奥野勝久(路介)、福田克彦(元小川プロ映像作家)と私と同年齢の死が続いた。'97年6月には元同志社大学友会委員長・田所伴樹、1年後刊行された追悼集『笑む』に私も寄稿した。同じ'43年生まれ、'62年入学の「大管法世代」だった。この追悼集の一文に「あじさいといちじいく」(佐川美代太郎)というのがあって、故人があじさいを好んでいたと知らされた。私は彼やクロヤギ、塩見らとまだヘルメットも被らず、石段下で練り広げた、35年前の梅雨空の下の激しい渦巻きデモの情景を思い浮かべて詠んだ。偶然だった。震災—京都近鉄業態転換—そごう倒産—日朝貿易の焦げ付き—商品開発の失敗と打ち続き、2001年、経営していた雑貨問屋を自己破産させてしまったのだが既に“追悼集”寄稿時、資金繰りの悪化などでその予兆を感じていた。そのためか、その文を次の句で締め括った。

流れましょう 瓦礫の径を 春の蝶

その後ドン底生活を維持しながら「支え合う弱者の会」と銘打って社会運動(ボランティア)に復帰。元旦は毎年妻や息子と炊き出しテントへ。

ふくよかに 汁食む^{とも}朋の 初日影 ('07,1,1東遊園地「神戸冬の家」)

短歌で遊ぼう(5)

さわ女と「寄っといで短歌」

題詠～「生」～

新年を私は癌告知を受けて迎えましたが前向きに精一杯これからも「短歌で遊ぼう」と思っています。今年もよろしく願います。旧友の愚蓮さんも癌を治して励ましのお便りをいただきました。ありがとうございます。歌も願いますよ。楽しみを増やしつつみんなとさわさわで共に！です。

影法師（岐阜刑）

12月に入り、寒さが身に沁みる頃となりましたが、「さわさわ」の会員の皆様、そして、さわ女さんにはお変わりありませんか。さて、さわ女さんには毎回心温まる感想とメッセージをありがとうございます。

更に連載中の「私の京都・大阪物語」はさわ女さんを知る上で必要な作品なので毎回楽しみにしておりますが、ハイジャック事件が発生した70年4月30日といえば私はまだ16歳であり、丁度その頃は仙台にある少年院から仮退院して東京は葛飾区四ツ木にある親戚の人が経営する小さな町工場でプレス工として働いておりました。休みとなると私の活動の拠点は上野や浅草等の下町が中心でしたので物語に登場してくる明治大学のキャンパスや逮捕されお世話になったという下谷警察署などはよく知っています。私がドジを踏んで上野警察署にお世話になった時などは、地検に行くバスが下谷警察に寄るために、時々元気なお姉さんたちと一緒に地検にいったことがありましたので、懐かしく思い出させていただきました。時に、いよいよ結審の日が近付いてきており、まさに命を削るような苦悩の日々を過ごしておられると思いますが、どうか最後まで望みを捨てずに頑張ってください。ではこれからますます寒さが厳しくなりますが風邪などひきませんように元気でお過ごしください。

- (1) 秋の陽を背中に浴びて青ガエル明日は雨だと声も勇まし
- (2) 刑受けて明日を忘れた獄舎にも金木犀の香りも優し
- (3) 万がいつどんな試練があろうとも本を枕に唄え讃歌を
- (4) 公判は命を削る日々なれど希望を捨てるな正義の女神
- (5) 面会所アクリル越しのハイタッチ躰は老いてもハートは青春

- (6) さわさわの旗を掲げて円山の血潮は滾る集いし友は
- (7) 杖ひとつ己が煩惱祓うため苦勞七坂お遍路参り
- (8) 誰れがため生きているのか夢もなく空に問えども吹くは風ばかり
- (9) 生きがいは求めるよりも作るもの座禅を組めば亦限りなし
- (10) 今日も亦生きてることに感謝して命の限り友を励ます

(8)～(10) 題詠

俳句

- (1) 体育祭歳を忘れて腰痛め
- (2) 走り雨萩を濡らして天の月
- (3) 麦蒔けば雀は渡り冬支度
- (4) 初霜や大地を枯らし雪如く
- (5) キャンドルを心に灯しクリスマス
- (6) 外は雪命温める便りかな
- (7) 生受けて夢幻の五十路かな
- (8) 大晦日 K1 観ながら蕎麦を食い

「俳句大歳時記」お送りくださってありがとうございます。鋭意勉強中です。また、今回少し影法師さんの来歴に触れていますが、ずいぶん若い時から「グレちゃった」のですね。私の小中学校時代のグレちゃった友人を思い出しています。I というのは、彼もいやつて、「ふうちゃん」「ふうちゃん」といつもくっついてきてたのに、中学でグレてしまいました。渋谷の「顔」で、私が高校時代、渋谷で遊んでいると、「ふうちゃん、何かあったらオレにいえよ。〇〇組の〇と言えばいいからな」なんて格好つけてました。東拘の接見禁止が解けてみたら、その彼から逮捕のすぐ後に手紙をくれていたこと、そしてもう病院で命が危ういことが書いてありました。接見禁止で手紙を数年後しか受け取れなかったために、接見解除の後にIの指定のアドレスに出したけれど、もう消息はわかりませんでした。死んだのでしょう。その彼を思い出しつつ、影法師さんも、いい友達がいたら、きっとまた違った道で活躍されていただろうと思います。人がグレたり間違いを犯すのはほんの一時期的ことですから。(私のいたところは、下谷警察署ではなく、菊屋橋署でした。)

影法師さんの生きる姿勢を示すためか、回を追うごとに、歌がぐんと明かるものになっていますね。(3)も(5)も(9)もそんな歌です。今回は益々前向きな力が漲っています。(6)のさわさわの旗も情景を共にしているようにスクラムを組む仲間のようにです。そして心根の優しさが(1)、(2)に出ています。(4)も(10)もきっと励ましの歌、ありがとうございます。

俳句の方は「鋭意勉強中」と言いつつ、読むばかりでまだ難しいところ。こちら「動き」を詠んだ明かるい句が多いですね。そちらは(8)のように、「X1観ながら」なんてありますか？こちらは「耳の紅白」でした。(2)(3)(4)の情系がいいですね。(5)はグラビアに一句という感じでうまいですね。明かるい心が伝わってきます。

M・M (岐阜刑)

重信房子さんの「私の京都・大阪物語」を(1)～(5)まで拝読いたしました。なげかどどん引き込まれていきます。次号がとても待ち遠しく、今後愉しみになってきました。そして平良氏の面会記も深く感動しました。長い間、殺伐とした中で生活しているせいか目に潤むものを感じました。また「自給自足の山里」からも、どん底からの人生再出発をなしとげられた大森氏から「もう一度一から出直せる」という勇気をいただいた気がし、人生に意気に感じさせられました。

- (1) 生を受け老いて死ぬも現実を目の前にして歳思ひをり
- (2) さようならぶらんこをこぐありがとうなみだのとまるまでこぎつづけ
- (3) 母の目は人に迷惑かけるなど言はんばかりに吾見つめつつ

(1)～題詠～

俳句

- (1) いつまでも沖をみつめている砂日傘
- (2) 格子戸の畳に映る小春かな
- (3) 渋団扇かまどの上にさめけりて
- (4) 独居机膝撫でまわす寒さかな
- (5) 切り取って葡萄の房の重みかな

私の一般的なでない物語は、人が読んでもおもしろいかなあと、躊躇しつつ始めたのですが、嬉しい反応です。また、平良さんの友情にも共感して下さりありがとうございます。あーす農場は私も行ってみたい！と同感です。自由を得たら私も行くと思っています。

M・Mさんの母へのお詫びと感謝の心が伝わります。この(3)が一番気に入りました。どのさわさわの仲間たちにも共通体験がありますよ、きっと。(私もね)(1)、(2)は人生の^{瞬間}を見つめつつ歌った心が出ていて、静かな思いが伝わります。だからこそ主導的に生きて行くようではありませんか。歌がその一つの場になっているのはいですね。

句の方もどれもいいですが、うまい！と、朝日俳壇でも載りそうなのは(5)です。これ

はすごい重量感と情景です。こういう風に句は詠むものだと思います。私はまだ句は学習中です。(5)のようなのを読むと、うーむ私も…と思いますのですけれどもまだまだです。今年は私も句も頑張ってみないです。

Y・M (千葉刑)

5号届きました。小説等、色々読むものがありますが、「さわさわ」は私を一つの心の安らぎの中へ導いてくれます。さわ女さん、頑張ってくださいという言葉はたくさん届いていると思いますが、私は気合入れて、心はリラックスして生きてくださいと願っています。

- (1) 権力にしがみついたる人々は命のお金無駄に流せし
- (2) どここの世もおのれ次第に過ごし方心に忘れず生きて生きてと
- (3) 生きるには制限多し獄の中心は自由にどんな人にも
- (4) 獄の中アラブの星は見えなくてもあなたがいますそこに星あり

励まありがとうございます。獄にあっても生きるぞ！生きろよ！という呼びかけが聞こえるようです。(3)の「心は自由にどんな人にも」平等にありますね。それをどう生きるかは私たちの姿勢に掛かっています。“さわさわ”と友に。“星”と言われたからにはリラックスよりも本当にまた頑張っちゃいそう。すぐおだてには乗ってしまふ方ですよ。ありがとうございます。

ごめんねジロー

さわさわの旗さわやかにデモ行進 10・19 反戦平和 警察が去年の倍ほど動員してきたのに対し、わが方は去年のほぼ半分。どないしたんやろね。佐高ハンには処凛ちゃんほどの動員力がなかったということやろか？それはともかく、今回手にしたピラで知りましたが、「政治犯への不当弾圧に反対する会(仮称)」。これはマジでやらないかと思っています。有為転変、紆余曲折はあろうとも、同時代を生きた人間として、彼らを見殺しにする、知らんぷりするわけにはいきませぬ。不当な弾圧を受けている政治犯の早期釈放を勝ち取る闘い—「さわさわ」はその中核を担う存在です。私が今できることは、心当たりに「さわさわ」の定期購読者になるよう呼びかける程度です。やってみようとおもいますので、とりあえず最新号5冊送ってください。(送料込み2千円同封します)

- (1) コスモスとセイタカアワダチ背くらべやがて枯れゆく秋の夕暮れ

(2) 真夜中にトイレに立ちし妻の床もぬけの殻の「も」って何だ？
ありがとう。「さわさわ」のセールス活動まで！同時代の連帯を受けて、少し意
固地な茅掘りの心を思いつつありがとうと感謝です。(1)は晩秋から初冬のそ
の広々とした原っぱを目の前に差し出されたようで、いい一首だなあとします。
(2)はこれはきつと、歌人のなかでも受けそうですよ。こういうおもしろい歌を歌うプロ
がいますが、名前を失念。この一首から思わず私は辞書を引きました。「も」って
何だ？「藻抜け①セシ、へびなどが外の皮を脱ぐこと。もぬけの殻①人が逃げ
去ったあと②魂が抜け去ったあとの体」とありました。藻は水草植物ですって。こ
れを総合しつつ妻の不在にふと不安を感じつつ今存在していることに感謝して、
この「も」の言葉とは何だ？と寝たまま天井を見ながら、安心して考えているジ
ロ一さんが浮かびます。妻に感謝の一首とみました。

かおり女

11・19共同行動の集会の人数が昨年と比べて少なかったというのは、指摘され
るまでそれほど感じていませんでした。どの位だったんでしょうか？

私は去年より定着しつつある感触がありましたし、“満を持して”という感じもあり
ました。反戦老人クラブの旗見られました？手作り風で、なんとも見ているだけで元
気が出てくるようで。住吉さんのつれ合いが「あんたら『反戦おばちゃんクラブ』で
も旗揚げしたらどうや」と冗談言っていました。そういうのもありやな、とか思っ
たり。重信さんの言う“良き日本人”として生きる幅を広げていきたいと思う今日この
頃です。

- (1) さわやかにさわさわの旗空の色自由の風受け誇らしきかな
- (2) ガザ空爆に我が封印解かれたり我を忘れてデモに飛びこむ
- (3) 手から手へともる炎のダマスカスもうこれ以上殺らせはしない

かおり女さんの笑顔の旗手 さわさわの旗を空になびかせて笑んだ住吉さ
んとかおり女さんの写真は房内の宝物となっています。この歌も一緒に届きました。
反戦老人クラブや他の多くの旗共々、「さわさわ」も変革を求める人々の仲
間入りできて幸せでしたね。編集長にはこの一首をつけて「さわさわ」6号はカラ
ーコピーの表紙にしてくれたらいいのに！と思っているところです。(財政難でそ
れは無理でしょうけれどね)

いい広がり之歌を詠みますね。年末年始には、ガザ空爆に抗議して、居合
わせたダマスカスでデモにも参加したり、お便りをいただきました。「さわさわ」の旗
手以来、ぐっと大胆に前進ですね。私が行けないアラブの大地をかおり女さん
が踏みしめて私の気持ちを代弁してくれてるようで嬉しいです。そんな力はきつとま
た、「さわさわ」を育てていよう。感謝・今年もね。

おおみ女

(1) 空色の旗に集へる防人の反戦の祈り蒼天に吠ゆ

(2) 冴へ冴へと満月の映ゆ農場に山影は深き闇を落しぬ

なかなかの詠み手登場です。彫刻したり絵を描いたり、アーティストのおおみ
女さんは色彩のある歌を詠みますね。

10・19に旗めく「さわさわ」の旗が見えるようです。“蒼天に吠ゆ”が心強くて1
0・19のあの時を現認するようです。今年もデモはぜひ！と思わずにはいられま
せん。また、あーす農場でしょうか。満月の下、人生を再出発させる意志と力が見
えるようです。短歌は慣れておられるのでしょうか。今後とも、色彩のある版画
同様にまた、詠んでみてください。

哲薫

- (1) 一陣の風吹きまくり過ぎ去る身重き荷背負いつ団塊世代
- (2) 定年後決めし課題は福祉なり面白き予感君に出会いて
- (3) 定年せし我をいじめた憎き上司来たれよきつい介護でお返し
- (4) 満月背に南に輝く金星めざして夜のウォーキング
- (5) うららかな秋の一日を釣りで過ごす魚の宝庫錦江湾

哲薫さんから19首いただきました。どれも哲薫さんの“生きる”姿勢が出ていてな
かなか良いものでした。題詠は「生きる」ですが、哲薫さんの遷厝を迎え、会社を
去る想い、そして定年後の道筋を決めつつ、釣りに心とむ日々、そんな生きる姿
を描きつつ、いくつもの中から、5つ選びました。(1)、(2)、(3)は、どのサラリーマ
ンも思い当たる心情ですね。(1)、(2)は尽してきた労働の誇りと、会社という虚し
い他人の器、定年を迎えた一人からの出発の意志が感じられます。(2)で定年
後の希望、そして(3)でユーマアと少し本音の思いを詠んでいたのがおもしろく、選
びました。(4)はもう短歌作りに慣れた一首ですが、上の句を五字加えた方がよ

いです。「南に輝く星一つ」とか。(5)も結句を錦江湾で止めず、「錦江湾にて」か、「錦江湾在り」か、音にしてみると、七文字の方が定まる気がします。どんどん歌い慣れて、日常をうたっているのがいいです。大躍進中にエールを送ります。

健蕉

友の顔今日は如何にと獄窓へ踏み行く道に落葉舞い来る
面会ありがとうございます。いつも病気を気にかけてくださって、12月の「腫瘍マ
ーカ一陽性」にも、かけつけてくださいました。そんな時の小菅の風景を描いて詠
んでくれました。初の一首です。哲蕉さんの友人なので、刺激されましたね?!今
後とじゃんじゃん送ってください。健蕉さんの芸術の心はきっと、歌にも生きてく
ると思います。

華灯

人はなぜ生きるのかと問う君に我れうつむきて冬の棘抜く
歌人として節氣ごとに詠んだ歌を送ってくださいます。共に聞いたあの69年か
ら、彼の持っていた炎のやさしさが、遷暦を経て、おだやかなやさしさの目線でたく
さん詠まれています。見ようとしなければみえないものを、ごく自然に見つめ、ある時
は昆虫の目線で、ある時は鳥の目線で人生を詠んでおられます。
題詠に寄せられた一首は、うまいなあ…と思わず感嘆しました。こんな思いにな
る時がありますね。私の聞いていた戦場を切実に思い出しました。他にこんな歌も
あります。

- ・デモ写し珍しきもの見たと言いまメールする人顔少しゆがむ
 - ・種残す強き意志あり暖ありてヒメマツヨイグサ晩秋に咲く
 - ・執拗に思い出だけを語る父塾柿に残る涙が連れ来る
- 他にもたくさん心に響く歌を送ってくださって、独房で声を出して読むと懐かしさ
がこみあげます。ありがとうございます。

原啓介

- (1) 生きるとはかくの如しか友在りて見据える先が我らの世界
- (2) 今は亡くはや六年の月日たち消されぬままの友の携帯
- (3) 若き日は希望を胸に快活に語り尽くした我らが未来
- (4) 振り返りなお振り返りたち消えぬ生きた証の手記を読みつつ

(5) 生きてこそ泣くこともあり笑むもあり水平線に視線落しつ

一首目は10・19の集いの喜びを歌っています。この歌は、10・19の集会とデ
モの写真とともに送られてきました。「このままでええの?!日本と世界」という横断幕
の写真と「さわさわ」の水色の旗を掲げて行進中の写真にこの歌の真意が込
められています。きっと、「さわさわ」のみんなの思いを代表している心情が歌われて
いますね。良い一首です。その後届いた四首は若い日、世界革命に自分た
ちの実存をかけた自分たちの仲間を歌っています。彼は自裁したのですが、「生
きる」の題詠で彼を詠むのは、原さんらしい精神です。彼の死から逆に原さん
には、あの若年の、何者にならねどという熱い闘いの志は、日を追うごとに生きて、
心にわたかまっているのだと思います。彼が生きているように。そして、彼の死に衝
撃も、また、怒りも愛も抱きながら、やっぱり生きていてほしいという、原さんの熱い思
いが、穏やかに心に響いてくる、「生きる」の歌です。原さんは、歌に慣れて、こつ
も得たようです。作り出して一年過ぎ、今度は、「歌を詠む時の想いや心掛け」
を書いてみてくださいよ。

森本忠紀

- (1) 言うことなし京都円山集会に一年振りの笑顔を見れば
- (2) デモに生きデモに死なんとのたまうは京都老人反戦クラブ
- (3) 秋晴れの都大路をデモの波ひときわ高く「さわさわ」の旗
- (4) 二女性が「さわさわ」の旗高々と掲げてデモの颯爽と行く
- (5) 遠来の友を迎えて畝傍山冬日に長く稜線延ばす
- (6) 見慣れたる二上が今日は眩しきよ大和を賞でる友と仰げば
- (7) 吾が買ひし「悩む力」を拾ひ読む母は背中を丸く屈めて
- (8) 吾も人も生きてるんだと実感す三線片手に路上に歌えば
- (9) 生きるとは泣くことなんだ新生児電話より聞くビッグバンの音
- (10) 生きるとは闘うことと学びたる六十路半ばの人生なるか
- (11) 言いたいこと一杯あつて零れ出る生に憧れ抱いて私は

(8) ~ (11) 題詠

(1) ~ (4)まで、秋の反戦の集いの湧き上がる様が伝わります。「さわさわ」
旗を田川さん、森本編集長で間に合わせたのでしたね。感謝!みんなの揺

れる棋の中、仲間の一つとして、さわさわ棋登場は嬉しいことでした。いろんな方が棋手を務めておられたと聞きました。なかでも(4)の歌のようにさっそくした妻は、嬉しい写真で見ることができました。「さわさわの棋高々と掲げ持ちおみなの棋手らさっそく行く」下の句を少し変えてみました。目に写真通りの情景を描きつつ。みんなの連帯に参加できたようで私も嬉しいことでした。(5)は正調で格調も高いいい一首ですね。「稜線延ばす」がポイントで、この歌を引き立てています。いつも森本さんは日常や動作を切り取って歌うことが多いのですが、こんな風景も美しいですね。(7)も母の妻がいいし、(10)も(11)もそれぞれが、生きる妻が妙に視界に具体的に見えます。(10)は以前の森本さん的一首と重ねてみると、「生きるとは闘うことと学びきぬつまり多し我が人生六十路」というのどろうでしょう。

さわ女

- (1) 生きること愛語り合うこと照れくさく闘い語りつ冬の月見る
- (2) 殉教は生きることだと言ひし友二歳の娘残して逝きぬ
- (3) 闘いの歴史を逆さにたどりつつやっぱり生きてほしかった友よ
- (4) チェ・ゲバラを愛する我ら戦場で生きのびる思想パレスチナに学ぶ
- (5) 独房で人間活動封じられつ生きているのは友ありてこそ

次号7号の題詠は「友」です。作品をお待ちしています。

【編集後記】この、「さわさわ」6号の編集も最終段階となった一月のある日、私は父の車椅子を押して、大阪・心斎橋の商店街を歩いておりました。父は各店の店頭を飾る品物の一つ一つをじっくり吟味するように視線を注いでいます。私はここぞとばかり話しかけます。「ほらね、探し物は売ってないでしょ。」父の探し物とは軍服です。脳梗塞で寝たきりとなった90歳の父は、夢と現^{うつ}の境界を自由に出入りできるようになって、近頃は、陸軍少佐に昇進したと毎日喜んで語ります。昇進披露のパーティーがあるので、その時に着る軍服を買いに行くと言ひ始めました。こちらは適当に話を会わせるようにしておりますが、話だけではすまなくなつて、軍服を売っていると父が言う、心斎橋商店街まで出掛けずには収まらなくなりました。現実の商店の姿を自分の目で見て軍服な

んぞ売ってないということをお納得してもらう他なくなり、急遽、奈良県大和高田市から心斎橋まで出かけるということになりました。ところがこちらの読みが浅く、そう、思うように事は進みません。「いや、闇でやってるらしいわ」と父は言います。「えーっ？じゃあどうするの？」とふてくされて言う私に、「聞いてみるわ」と父は落ち着いたものの。この確信としたたかさに私は目を開かされました。夢の中にいることの昂ぶりや偏狭がないことに驚いたのです。寒いし、父が疲れるのを待って「帰ろう」と言うタイミングを計っていた私の方が疲れるくらい、父は元気一杯です。それでいて、実際に軍服のことを聞き出すというような逸脱はありません。いよいよ帰る段になって、「結局、パン食べに来ただけやった」とあっさり言っています。こんなにも自身の人生と和解的に老後を過ごす父という人格に私は自分はこうは行かないと及ばぬものを感じました。また、人間にとって、フィクションの持つ意味—そこにある真実についても考えさせられました。ベッドの上で四六時中過ごすことを余儀なくされて、なお生きようとする精神が生み出した世界、それが夢と現実の境を取っ払った空間ということなのでしょう。それは、専ら介護されるだけの存在としての生と比べてどれほど能動的であることでしょうか。その時、ただ命を持続すること以上に積極的に生きようとする意志—父の精神にとって、フィクションはいかに真実であることか、と思います。私たちはなおそれを妄想としか呼んでおりませんが…。帰ると、ちょうど夕食の準備中で、次女の4歳のなずなは椅子を使って台所に立ち、ナイフでカレールーを切っております。「今日はなずながカレーを作ったよ」と嬉しそうに報告してくれます。何でも一人でやるのが好きで、「ママは一人でやるから、なずなも一人でやる」と言います。それでも一人ではできないことはよく知っていて、「ママと一緒にやったことは言わないでね」と内緒話をします。ここにもフィクションの持つ真実があることに私は気付きました。なずなが言う、一人でカレーを作ったことにするというフィクションは、実際に一人でカレーを作ったこと以上の創造性があると思います。そしてなずなはそのことを知っています。知っているからそのようなフィクションを仕掛けてくる—楽しそうななずなの笑顔がそのことを雄弁に語っています。／「毎号重信房子に関する簡単なプロフィールを載せてほしい」「さわさわ」を読んで下さったNさんという読者の方からいただいたお便りの中にこのような要望をいただきました。Nさんは「内容がぐっと濃く、パンフ制作に携わる人の熱意が読んでいて伝わってきました」という嬉しい感想を述べてくださっています。

そして、「世代によって関心度に差が出る、私は重信房子さんのことをまったく知らない、なぜ支援される側の人なのかパンフを読んでもわからない」とも述べておられるので、Nさんへの返事を以下に書いてみました。「1970年代、Nさんが生まれる前かも知れません。国家権力を相手取り、獄中に捕らわれ中の人を何人も解放させるという大胆果敢な闘いがありました。その闘いを成功させたグループのリーダーが今、国家の威信を傷つけられ、面目をつぶされたことへの仕返しをされているというのが、重信さんが獄中に捕らわれていることの真の理由です。したがって、1974年のオランダ・ハーグのフランス大使館を占拠する闘争に関わったとして20年の実刑判決を言い渡されていますが、この裁判自体がまったくのフィクションです。それは、無実のひとを重罪に処するために、支配権力の中核によって編み出された恐ろしくも無内容な筋立てのドラマです。重信さん自身が述べておられる「最終意見陳述要旨」という冊子があって、ここで^{くだん}件のフィクションが完結なきまでに粉碎されています。が、重信さんのこれまでの歩みといったものを知るには、最近「図書新聞」に掲載されたインタビュー記事があります。コンパクトにギュッと凝縮されていて、重信さんのプロフィールとしては一番のお薦めで、早速送ります。もうひとつ知ってほしいのは、重信さんの、社会変革に賭ける積極果敢な意志と、尽きせぬ情熱です。これがために重信さんは2000年の秋以来、未だ捕らわれの身であるということであり、獄外から支援が集まるのも同じ理由からです。どんな過酷な状況にも、諦めるということを知らず、決して絶望しない不屈の精神に大きな感銘を受け、限りない共感を示す人々…。大部分は60年、70年代、共通の理想に燃えた、かつての若者で、私もその一人です。そして、Nさんのような若い人たちの理解を心から望んでいます。次の感想、お便りを楽しみにお待ちしております。」

このような、人間の自由を奪い、人間を殺すフィクションに対抗し、これを打ち壊すにはどうすればよいでしょうか。それには、フィクションを暴くことはもちろん、人間が生きることができる、真実に満ちたフィクションを私たちが作っていくことではないでしょうか。それが「さわさわ」の役割だと私は考えています。(森本)

販売は1冊300円です。なるべく年間購読をお願いします。送料込みで、年会費は2000円です。

(郵便振替口座 00920-2-169764 さわさわの会)

連絡先—〒635-0061 大和高田市磯野東町3-27 森本忠紀

Tel/Fax 0745-22-4002 mail : toppinsyan@kpa.biglobe.ne.jp